

博士問題とマードック先生と余

夏目漱石

青空文庫

上

余が博士に推薦されたという報知が新聞紙上で世間に伝えられたとき、余を知る人のうちのあるもの或者は特に書を寄せて余の栄選を祝した。余が博士を辞退した手紙が同じく新聞紙上で発表されたときもまた余は故旧こきゆうしんち新知もしくは未知のある或ものからわざわざ賛成同情の意義に富んだ書状を幾いくつう通も受取った。伊予いよにいる一旧友は余が学位を授与されたという通信を読んで賀状を書こうと思つていた所に、辞退の報知を聞いて今度は辞退の方を目出めでたく思つたそうである。貰もらつても辞してもどつちにしても賀すべき事だ

というのがこの友の感想であるとかいつて来た。そうかと思うと悪戯好いたずら好きの社友は、余が辞退したのを承知の上で、故ことさらに余を厭がらせるために、夏目文学博士殿と上書うわがきをした手紙を寄こした。この手紙の内容は御退院を祝すというだけなんだから一いちぎよ行うで用が足りている。従つて夏目文学博士殿と宛名を書く方が本文よりも少し手数てすうが掛つた訳である。

しかし凡すべてこれらの手紙は受取る前から予期していなかつたと同時に、受取つてもそれほど意外とも感じなかつたものばかりである。ただ旧師マードック先生から同じくこの事件について突然封書が届いた時だけは全く驚ろかされた。

マードック先生とは二十年前に分れたぎり顔を合せた事もなけ

れば信書の往復をした事もない。全くの疎遠そえんで今日まで打ち過ぎたのである。けれどもその当時は毎週五、六時間必ず先生の教場へ出て英語や歴史の授業を受けたばかりでなく、時々は私宅まで押し懸けて行つて話を聞いた位親しかつたのである。

先生はもと母国の大学で希臘語ギリシヤゴの教授をしておられた。それがある事情のため断然英国を後にして単身日本へ来る気になられたので、余よらの教授を受ける頃は、まだ日本化しない純然たる蘇スコツトランドゴ國語を使つて講義やら説明やら談話やらを見境みさかいなく遣やられた。それがため同級生は悉く辟易へきえきの体ていで、ただ烟けむに捲まかれるのを生徒ぶんの分ぶんと心得ていた。先生もそれで平氣のように見えた。大方どうせこんな下らない事を教えているんだから、生徒なんか

に分つても分らなくても構かまわなないという気だつたのだらう。けれども先生の性質が如何にも淡たんぱく泊ぱくで丁寧ていねいで、立派な英国風の紳士と極端なボヘミアニズムを合がっぺい併べいしたような特殊の人格を具えているのに敬服して教授上の苦情をいうものは一人もなかつた。

先生の白ホワイト襯トシャート衣イを着た所は滅多めつたに見る事が出来なかつた。

大抵は鼠色ねずみのフラネルふろしきに風呂敷ふろしきの切れ端はしのような襟ネクタイ飾イを結んで済すましておられた。しかもその風呂敷ふろしきに似た襟ネクタイ飾イが時々チヨツキ胴着ドムキ

の胸から抜け出して風にひらひらするのを見受けた事があつた。

高等学校の教授が黒いガウンを着出したのはその頃からの事であるが、先生も当時は例の鼠色ねずみのフラネルふろしきの上へ縺しゆす子すか何かのガウンころもを法衣はおつのように羽織はおつていられた。ガウンの袖口には黄色い平ひらう

打うちの紐ひもが、ぐるりと縫い廻めぐしてあつた。これは装飾のためとも見られるし、または袖口を括くくる用意とも受取れた。ただし先生には全く両様の意義を失つた紐に過ぎなかつた。先生が教場で興きように乗じて自分の面白いと思う問題を講じ出すと、殆んどガウンも鼠シヤツの襯衣シヤツも忘れてしまう。果はてはわがいる所が教場であるという事さえ忘れるらしかつた。こんな時には大おお股またで教壇を下りて余らの前ひげへ髻ひげだらけの顔を持つてくる。もし余らの前に欠席者でもあつて、一脚の机が空あいていれば、必ずその上へ腰を掛ける。そうして例のガウンの袖口に着いている黄色い紐を引張つて、一尺程の長さを拵こしらえて置いて、それでぴしやりぴしやりと机の上を敲たたいたものである。

当時余はほんの小供こどもであつたから、先生の学殖がくしよくとか造詣ぞうけいとかを批判する力はまるでなかつた。第一先生の使う言葉からが余自身の英語とは頗すこぶる縁ゆかりの遠いものであつた。それでも余は他の同級生よりも比較的熱心な英語の研究者であつたから、分らないながらも出来得る限りの耳と頭を整理して先生の前へ出た。時には先生の家うちまでも出掛けた。先生の家は先生のフネルフネルの襯衣シヤツと先生の帽子——先生はくしゃくしゃになつた中折帽なかおれぼうに自分勝手勝手に変な鉢巻はちまきを巻き付けて被かむつていた事があつた。——凡すべてこれら先生の服装に調和するほどに、先生の生活は単純なものであるらしかつた。

その頃の余は西洋の礼式というものを殆んど心得なかつたから、訪問時間などという觀念を少しも挟さむ氣兼なしに、時ならず先生を襲う不作法を敢てして憚からなかつた。ある日朝早く行くど、先生は丁度朝食を認めている最中であつた。家が狭いためか、または余を別室に導く手数を省いたためか、先生は余を自分の食卓の前に坐らして、君はもう飯を食つたかと聞かれた。先生はその時卵のフライを食つていた。なるほど西洋人というものはおんなものを朝食うのかと思つて、余はひたすら食事の進行を眺めていた。実は今考えるとその時まで卵のフライというものを

味わった事がないような気がする。卵のフライという言葉もそれからずつと後に覚えたように思われる。

先生はやがて肉刀ナイフと肉匙フォークを途中で置いた。そうして椅子を立

ち上がって、書棚の中から黒い表紙の小形の本を出して、そのうちの或あるページ頁を朗々と読み始めた。しばらくすると、本を伏せて

どうだと聞かれた。正直の所余には一言も解らなかつたから、

一体それは英語ですかと聞いた。すると先生は天来の滑稽を不用

意に感得したように憚りなく笑い出した。そうしてこれは希臘ギリシヤ

の詩だと答えられた。英国の表エキスプレッション現ちんぶんかんに、珍紛漢珍紛漢の事を、

それは希臘語さというのがある。希臘語は彼地かのちでもそれ位六むずかしい物にしてあるのだらう。高等学校生徒の余などに解るはずは

無論ない。それを何故^{なぜ}先生が読んで聞かせたのかというと、詳しい理由は今思い出せないが、何でも希臘の文学を推^{すい}称^{しょう}した揚^あ句^{げく}の事ではなかつたかと思う。とにかく先生はそういう性質^{たち}の人なのである。

先生の作つた「日本におけるドン・ジュアンの孫」という長詩も慥^{たし}か聞かされたように思う。けれどもそのうちの或^{ある}行^{ぎょう}にアラス、アラツク、という感投詞が二つ続いていたと記憶するだけで、あとはまるで忘れてしまった。

ベインの『論理学』を読めといって先生が貸してくれた事もあった。余はそれを通読するつもりで宅^{うち}へ持って帰つたが、何分^{なにぶん}課業その他が忙がしいので段々延び延びになつて、何時^{いつ}まで立つ

ても目的を果し得なかつた。ほど経て先生が、久しい前君ぜんに貸したバインの本は僕の先生の著作だから保存して置きたいから、もし読んでしまったなら返してくれといわれた。その本は大分たんね丹念んに使用したものと見えて、裏うらおもて表おもてとも表紙が千切ちぎれていた。

それを借りたときにも返した時にも、先生は哲学の方の素養もあるのかと考えて、小供こども心こころに羨うらやましかつた。

あるときどんな英語の本を読んだら宜よかろうという余の問に応じて、先生は早速さつそく手近にある紙片に、十種ほどの書しよもく目したたを認めて余に与えられた。余は時を移さずその内の或物を読んだ。即座に手に入らなかつたものは、機会を求めて得たる度たびにこれを読んだ。どうしても眼に触れなかつたものは、倫ロンドン敦ンへ行つたとき買つて

読んだ。先生の書いてくれた紙片が、余の袂たもとに落ちてから、約十年の後に余は始めて先生の挙げた凡すべてを読む事が出来たのである。先生はあの紙片にそれほどの重きを置いていなかったのだろう。凡てを読んでからまた十年も経った今日から見れば、それほど先生の紙片に重きを置いた余の方でも可笑おかしい気がする。

外国から帰った当時、先生の消息を人伝ひとづてに聞いて、先生は今鹿児島的高等学校に相変らず英語を教えているという事が分った。鹿児島から人が出てくる度に余はマードックさんはどうしたと尋ねない事はなかった。けれども音信はその後二人の間に全く絶えていたのである。ただ余が先生について得た最後の報知は、先生がとうとう学校をやめてしまって、市外の高台たかだいに居きよを卜ぼくしつつ、

果樹の栽培さいばいに余念よねんがないらしいという事であった。先生は「日本における英国の隠者いんじや」というような高こう尚しょうな生活を送つてゐるらしく思われた。博士問題に關して突然余の手に届いた一封の書翰は、実にこの隠者が二十余年来の無音ぶいんを破る価ありと信じて、とくに余のために認したためてくれたものと見える。

下

手紙には日常の談話と異ことならない程度の平易な英語で、真率まじめに余の学位辞退を喜むねこぶ旨むねが書いてあつた。その内に、今回の事は君がモラル・バックボーンを有している証拠になるから目出めでたい

という句が見えた。モラル・バックボーンという何でもない英語を翻訳すると、徳義的脊髄という新奇でかつ趣おもむきのある字面じづらが出来る。余の行為がこの有用な新熟語に価するかどうかは、先生の見識に任せて置くつもりである。（余自身はそれほど新らしい脊髄がなくても、不便宜なしに誰にでも出来る所作しよさだと思ふけれども）

先生はまたグラッドストーンやカーライルやスペンサーの名を引用して、君の御仲間も大分あるといわれた。これには恐縮した。余が博士を辞する時に、これら前ぜんじん人の先例は、毫ごうも余が脳裏のうりに閃ひらめかなかつたからである。——余が決断を促がす動機もつとの一部分をも形づくらなかつたからである。尤も先生がこれら知名の人の名を挙げたのは、辞任の必ずしも非礼でないという実証を余に紹

介されたままで、これら知名の人を余に比較するためでなかつたのは無論である。

先生いう、——われらが流俗以上に傑出しようとするのは、人として当然である。けれどもわれらは社会に対する榮譽の貢献によつてのみ傑出すべきである。傑出を要求するの最上権利は、凡てすべの時にいにおいて、われらの人物如何いとわれらの仕事如何によつてのみ決せらるべきである。

先生のこの主義を實行している事は、先生の日常生活を別にしても、その著作『日本歴史』において明あかに窺うう事が出来る。自白すれば余はまだこの標準スタンダード的ド述ウ作オーを讀んでいないのである。それにもかかわらず、先生が十年の歲月と、十年の精力と、同じ

く十年の忍耐を傾け尽して、悉くこれをこの一書の中に注ぎ込
 だ過去の苦心談は、先生の愛弟子山県五十雄君から精しく聞いて
 知っている。先生は稿を起すに当つて、殆んどあらゆる国語で出
 版された日本に関する凡ての記事を讀破したという事である。山
 県君は第一その語学の力に驚ろいていた。和蘭語でも何でも自
 由に読むといつて呆れたような顔をして余に語つた。述作の際非
 常に頭を使う結果として、しまいには天を仰いで昏倒多時にわ
 たる事があるので、奥さんが大変心配したという話も聞いた。そ
 ればかりではない、先生は単にこの著作を完成するために、日本
 語と漢字の研究まで積まれたのである。山県君は先生の技倆を
 疑つて、六むずかしい漢字を先生に書かして見たら、旨うまくはないが、

劃^{かく}だけは間違なく立派に書いたといつて感心していた。これらの準備からなる先生の『日本歴史』は、ことごと悉く材料を第一の源^{みなもと}から拾い集めて大成したもので、儲^{もう}からない保証があると同時に、学者の良心に対して毫^{ごう}も疚^やましからぬ徳義的な著作であるのはいうまでもない。

「余は人間に能^{あと}う限りの公平と無私とを念じて、榮譽ある君の国の歴史を今になお述作しつつある。従つて余の著書は一部人士^{じんし}の不滿を招くかも知れない。けれどもそれはやむを得ない。ジョン・モーレーのいつた通り何^{なんびと}人にもあれ誠実を妨ぐるものは、人類進歩の活力を妨ぐると一般であつて、その真正なる日本の進歩は余の心を深くかつ真面目^{まじめ}に動かす題目に外ならぬからである。」

余は先生の人となりと先生の目的とを信じて、ここに先生の手紙の一節をありのままに訳出した。先生は新刊第三卷の冒頭ぼうとうにある緒論しよろんをとくに思慮しりよある日本人に見てもらいたいといわれる。先生から同書の寄贈を受ける日それを一読して満足な批評を書き得るならば、そうして先生の著書を天下に紹介する事が出来得るならば余の幸さいわいである。先生の意は、学位を辞退した人間としての夏目なにがしに自分の著述を読んでもらつて、同じく博士を辞退した人間としての夏目なにがしに、その著述を天下に紹介してもらいたいという所にあるのだらうと思うからである。

——明治四四、三、六一八『東京朝日新聞』——

青空文庫情報

底本：「漱石文明論集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

1998（平成10）年7月24日第26刷発行

入力：柴田卓治

校正：しず

1999年8月5日公開

2003年10月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

博士問題とマードック先生と余

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>